

総合タイトル：多様性と現代

日時：2019年11月18日（月） 14：40～17：50（4・5講時）

場所：マルチメディア教育研究棟2階 M206

事前配付資料

教養教育院総長特命教授による公開の合同講義を行います。この講義は、総長特命教授担当の月曜日4講時・5講時の講義受講者はもちろん、学生・教職員・一般すべての方に開かれています。

今回の講義では、共通テーマを「多様性と現代」とし、前半に講義と質疑応答を行った後、休憩を挟み、後半で受講者とともに討論を行います。

【挨拶】

滝澤 博胤 理事・副学長（教育・学生支援担当）、高度教養教育・学生支援機構長、教養教育院長

【講義】

1. 進化的視点からみる精神的個性・価値観の多様性

河田 雅圭（進化生物学、生態学） 生命科学研究科教授

2. 多様性と多文化共生

佐藤 嘉倫（行動科学、ソーシャル・キャピタル論） 文学研究科教授

3. 多様性と主体

座小田 豊（哲学）教養教育院総長特命教授

【討論】

宮岡 礼子（微分幾何学）、米倉 等（開発経済学、地域研究）、鈴木 岩弓（宗教民俗学、死生学）、
山谷 知行（植物分子生理学）、水野 健作（分子細胞生物学）、**会場の皆さん**

【司会】

高木 泉（数理生物学）

◆この資料について◆

この合同講義は受講者の皆さんも参加するひとつの授業です。後半は皆さんにも発言していただきたいのです。この資料はそのために予め、前半に三名の教員が講義する内容の概略を、受講者の皆さんにお知らせするものです。これを読んで感じたこと、質問したいことを準備しておいてください。また、この資料は教養教育院の Web ページからダウンロードすることもできます。

当日講義を聞きながら考えた、あるいは予め考えてきた質問やコメントを質問・コメントシートに記入して、休憩時間に提出してください。その中の幾つかを採り上げて討論の材料とし、残りは教養教育院の Web ページの特集コラムで後日お答えします。

当日配付する資料の中に、今回の資料の最後にあるような質問・コメントシートを複数枚添付しますので、聞きたい相手（複数指定可）ごとに別の紙に書いてください。

総合タイトル： 多様性と現代

■ 主旨：

経済のグローバル化が急速に進展しているいま、様々な場面で「多様性 diversity」が議論されている。例えば、価値や文化の多様性、生物における種の多様性、民族や宗教の多様性、さらには空に輝く星に住む異星人の存在等々。維持・擁護・容認・保持といった用語で大まかには肯定的に捉えられているこの「多様性」について、改めて考える機会を持ちたいと思う。

私たち人類を例に見てみれば、多様性は、様々な軋轢の原因として働いてきたようにも見える。異質な文化や宗教を排除しようとするネガティブな性向は、至る所、あらゆる時代に見てとれる。「自国第一」を掲げるアメリカのみならず日本においても、移民や難民の問題が社会的・政治的な様々な困難の原因となっている。そこには、頼りない同一性に強い帰属意識を求め、排除の論理を用いて同一性を確認し合うという倒錯した衝動さえ見てとれる。陰惨な形で露呈してくる「いじめ」の問題も、脆弱な「仲間意識」という同質性に基づいて異質なものを排除しようとするところに原因がありそうである。性的マイノリティーである LGBT を「生産性」という論理で排除しようとした事件も、「いじめ」の一種である。

しかし、類や種の多様性は、人間に限らず、生物のあらゆる場面において最も大切なものではないだろうか。多様な種のいのちの営みを通して、生物はその固有性を多種多様な形で発展させてきた。人間の文化についても、他なるものに気づくことを通して自らの文化の固有性を自覚し、さらにそれを展開することが可能になる。多様性こそが新たな視点や、ものの観方の可能性を切り拓く。価値観の多様性を受け入れ認めること、なにより人間の個の多様性を認めることによってこそ、人々の個性をできる限り受け止めようとする普遍的な人間観が目覚めさせられるのではないか。多様性の持つ根源的にポジティブな意義はその辺にありそうである。貴方が貴方であることを確保するためにも、多様性について一緒に考えてみよう。

進化的視点からみる精神的個性・価値観の多様性

河田雅圭

東北大学大学院生命科学研究科

進化は、集団中に生じた遺伝的変異が頻度を上昇させたり、減少したりすることで生じる。ヒトの集団には、個人によって遺伝的多様性(遺伝的変異、遺伝子やゲノム配列の違い)が存在している。この違いは、ヒトの様々な特性の違い(身体的、生理的、行動的、精神的特性)に影響し、進化的プロセスによって拡大・消失・維持されている。これらヒト個人の間での遺伝子の違いは、開放性・外向性・誠実性・調和性・神経質性といった精神的個性の他、性的嗜好(異性間から同性間)、幸福感、リスク選択性、宗教心、社会のための行動(向社会行動)、集団・個人主義的傾向などの性格や価値観の違いにも影響を与えている。これらの遺伝的変異がみられる主な原因は、常に集団中に生じる新たな変異が生じているからである。個性の変異の一部は積極的に進化的に維持されるように自然選択が働いている場合も考えられる。

ヒトは、進化の過程で、高度な社会認知能力および共感性を神経・脳内機構として獲得し、多数のヒトが協力するシステムを進化させてきた。Harari, (2014,2016)によるとヒトの認知能力の獲得が、宗教、思想、倫理・道徳規範などをつくりだし、多数のヒト集団が従う規範(虚構)となっているとした。また、上に述べたように、ヒトの道徳心、宗教心、向社会行動など精神的傾向には個人によって遺伝的な多様性があり、ヒトがどのような規範(宗教や思想)を信じやすいかには、遺伝的違いが影響している可能性がある。

生物にとって、遺伝的多様性は進化の原動力である。また、生態系にとって、生物多様性の増大(種の多さ)は、生態系の機能を高めることが多くの研究で示されている。しかし、生物進化にとって、あるいは生態系にとって多様性が必要なことと、ヒトの多様性の意義や価値は切り離して考える必要がある。一方で、人間社会におけるヒトの多様性の価値や意義をどう考えるかという問題にも、ヒトが進化によって獲得してきた認知・共感能力に関する遺伝的多様性が影響しているということも考慮しなければいけない。

本講義では、ヒトの多様性がどのように進化するのかを解説した上で、人間社会での多様性の意義はどのようにとらえられるのか考察したい。

多様性と多文化共生

佐藤嘉倫（文学研究科）

1. 耳障りのいい言葉

「多様性」と「多文化共生」はとても耳障りのいい言葉であり、多くの企業や社会がそれを実現しようとしている。「従業員が多様な企業はパフォーマンスがよい」とか「多文化共生を実現できている社会は活力がある」とかいう言説が流布している。本講義では、あえて立ち止まって、これらの言説に対する留保条件を提示する。

2. 多様性は望ましいことか？

極端な例だが、戦闘状態にある小隊を想定しよう。さらにこの小隊は外国人部隊でさまざまな国の兵士からなっているとしよう。多様性の実現している小隊である。ここで、小隊長が「うちは多様な小隊だから、これからどう戦うかみんなの意見を尊重して議論しよう」などと言っていては敵にやられてしまう。このような状況では多様性は望ましくない。

もう少し身近な例をあげよう。小さな町で地元民に愛されている和菓子屋があったとしよう。この店主が外国人労働者を雇う必要があるだろうか。もちろんない。多様性を確保する必要がないからだ。しかしこの店主が野心家で和菓子チェーンをグローバルに展開しようとする、話は違ってくる。和菓子店を開店するそれぞれの国で地元の間人を雇わなかったら、それぞれの国の消費者の動向を把握できずグローバル展開は成功しない。

これらの例はコンティンジェンシー理論という組織理論の教えるところである。つまり、組織の最適な形態や構造はその組織が置かれている環境によって決まる、ということである。多様性は無条件で望ましいものではなく、企業や社会が置かれている環境によって望ましくなったり、望ましくなかったり、どちらでもよかったりする。

3. 多文化共生は実現可能か？

かつてアメリカ社会は「人種のるつぼ」だと言われたことがある。さまざまな人種が混じりあってアメリカ社会を作っているという言説である。しかし実は「人種のサラダボール」だと言われてきた。決して人種が混じりあうことはないという言説である。しかし現実にはサラダボールというより、サラダの素材がきれいに分けられた状態である。人種間、エスニック・グループ間の居住空間の棲み分けが持続しているからだ。このような棲み分けはアメリカだけではない。エスニック・タウンのようなエスニシティによる棲み分けは世界各地で見ることができる。日本も例外ではない。外国人労働者の集積する地域では日本人と外国人労働者の棲み分けが起こっている。

そして重要なことはこれも「多文化共生」だということである。さまざまな文化を持った集団が同じ地域に共生しているが、相互に干渉しない状態である。それではこの状況を脱するにはどうすればよいのか。本講義ではこの問題を考えたい。

多様性と主体——主体的に生きるために

総長特命教授 座小田 豊

「主体」あるいは「主体性」、よく使われる言葉・概念である。多くの人の中に埋没することなく、私たち一人びとりが自らの個人的特性を發揮し、自立的な思考を行使し行動するとき、「主体」そして「主体性」がある、とみなされる。ヨーロッパ諸語の subject (英) : sujet (仏) : Subjekt (独) は、共通の語 subjectus を語源としている。文法的には「主語」を意味するが、これを例にとって言うなら、「私は私である」の主語と述語の同一性を、どこまで保持できるのかということ、「主体」の重さが計られると言ってよいだろう。私たちはともすれば、他者・多者の意見に付和雷同して右往左往しがちではないだろうか。その時「私は私」とどこまで主張できるのか、容易ではない。又「私」を適切につかむことは誰にとっても難しい。「私」を過大に見積もっても、過小に評価しても、自分で足を絡ませて転んでしまいそうである。では、私たちが主体的に生きるとはどのようなことなのか。

そのためには、支えとなる手がかりが不可欠である。実のところ、自己同一性を確認するには、いや同一性を確保するには、何よりも他者・多者を必要とするはずである。「私が私である」という同一性の意識は、自分自身と他者・多者との差異と類似性とを介して初めて可能になるものだからである。つまり、隣の貴方との違いと類似点の確認を伴ってこそ、「私が生きる」ことが成り立つからである。そうでなければ、極端な話、他者もまたすべて「私」として意識されていることになるだろう。誰もが自分のことを「私」と称するし、たとえば、「人間」という概念を例にとれば、個人的な差異を一切無視すると、誰もが同じ「人間」ということになるはずである。これは、いわば、差異を全く持たないノッペラボウの面々たちが、ただただ「私」と言い合い、「人間」と称し合っている不気味な集団が出現する事態であろう。言うでもなく、彼ら、いやそれらは「私」とも「人間」とも到底名づけられない代物である。というのも、人はおのれを意識するのに、必ず他者を必要とし、同時に彼(女)との同一性と差異性を意識せざるをえないからである。そしてその他者が多様であればあるほど、それに呼応して自分自身の生命の内容も豊かになってくる。なぜなら、多様な他者たちを合わせ鏡にして初めて、人は自分の後ろ姿を省みるものだからである。

論理的な言い方をすれば、同一性とは本来、同一性と差異性との同一性であろう。他者との同一性と差異性を介してこそ、私たちの「自己同一性」は確保される。そのことを踏まえるなら、人間のみならず、自然的世界の多様性を介して、私たちは自然的存在者であるおのれを生きるのだと言うべきであろう。もちろん私には、自然的存在者でありながら、植物とも他の動物とも、さらには他の人たちとも異なる「私」であることは、その相貌からしてすでに明らかである。この世界には、この「私」と同じものは何一つとして存在しない。とはいえ、まったく異なるものもまた存在しない。私たちは、植物たちによって、動物たちによって、そして人間たちによって生かされており——それらや彼(女)らに対して抱く棄嫌と愛惜の情の別と差異は、それらの存在者に応じて、まったく多種多様ではあるが——、常に同時にこの自然的な、あるいは人間的な世界のうちでそれらと共生し共存し合っている。

「私」が自分らしく生きるとは、このような多様性の世界の中において、自分を「主体」として実感することに他なるまい。つまり、多様性あってこそその主体的な生なのである。

質問・コメントシート見本 (A5 カラー用紙)

東北大学教養教育院 総長特命教授合同講義

「多様性と現代」

2019年11月18日(月) 14:40~17:50

マルチメディア教育研究棟 2階 M206

質問・コメントシート

学籍番号		所属		氏名	
◇講義内容に関する質問・コメント (どの講義かチェックしてください)					
<input type="checkbox"/> 河田 雅圭 <input type="checkbox"/> 佐藤 嘉倫 <input type="checkbox"/> 座小田 豊					
(質問・コメント)					
◇講義内容以外の質問・コメント					
(質問・コメント)					